国際社会文化研究所紀要　第７号（2005年）

研究ノート

原爆と広島の寺院

新 田 光 子*

The Bomb and Hiroshima Temples.

Mitsuko NITTA*

This paper considers the problem of influences of the Bomb on Hiroshima Buddhist temples and is based on a questionnaire which I put to temples in Hiroshima in 2003.

More than 100 temples were completely destroyed by the force of the blast or in the ensuing fires. Much damage was inflicted on objects, including Buddhist images, buildings, gravestones and on human beings.

Injuries and deaths to countless parishioners of the temples were a severe obstacle to the reconstruction of these temples. The destructive results of the Bomb disrupted regular practice at the temples from just after the bombing until the present day.

In researching this project, it was necessary to look at the destroyed temples as a microcosm of Hiroshima itself.

はじめに

本稿は，広島に投下された原爆が宗教施設にどのような影響を及ぼしたかについて，広島市の仏教寺院を対象にして実施したアンケート調査の結果を提示し，若干の検討を試みるものである。

筆者は2003年度，特別研究員として，同年度国際社会文化研究所個人研究（研究課題「原爆と寺院の社会学的考察」）をおこなってきた。その研究成果の一部は，『原爆と寺院―ある真宗寺院の社会史―』（法藏館，2004年刊行，龍谷大学出版助成図書）で発表した。

本研究の目的は，広島の寺院の原爆被害を調べること，そして原爆被害ののち，寺院が広島の復興のなかでどのような役割を果たしてきたのかを検討することにあった。本研究では，こうした研究目的を達成するために寺院を対象としたアンケート調査，寺院檀信徒対象のアンケート調査，そして寺院関係者・檀信徒を対象としたインタビュー調査などを実施した。そのうちここでは，上掲書では十分検討できなかった寺院アンケート調査をとりあげ，調査結果をもとに，原爆の寺院への影響に関して少し検討しておきたい。

１．寺院アンケート調査の概要と調査結果

広島の原爆爆心地を中心に，仏教寺院199か寺（『昭和55年版　広島県宗教法人名簿』に記載され

＊ 龍谷大学社会学部

ている広島市内，および一部広島市近郊地域を含む仏教各宗派の寺院）を対象に，郵送法によりアンケート調査を実施した。

アンケート調査の実施時期は2003年６月であり，有効回答数は81，回答率は40.7%であった。

本アンケート調査では，上記宗教法人名簿による宗派分類にしたがって各寺院の回答を集計したが，ここでは寺院全体の単純集計を参考にして一般的な傾向をみておきたい。

原爆で住職が亡くなった寺院は，35.8%（29か寺）にのぼる。原爆で家族が亡くなったのは，63.0%（51か寺）である。

１か寺の檀家あるいは門徒の死没者数が，100人を超えている寺院は，38.3%（31か寺）であり，さらに200人以上の寺院は，28.4%（23か寺）にのぼる。この中には檀家・門徒の死没者を700人以上生じた寺院が３か寺含まれている。

本堂・庫裏の被害は全寺院が該当しているが，そのうち全壊・全焼寺院は，63.0%（51か寺）を占めている。

本尊の全壊・全焼状態は，24.7%（20か寺）であり，疎開していて無事であったという寺院もある。寺院過去帳が全部焼失した寺院は，30.9%（25か寺）であり，本尊同様疎開していて難を免れたものがある。

墓地の被害があった寺院は，65.4%（53か寺）である。被害をほとんど受けなかった墓地は18.5%（15か寺）存在している。寺院には，墓地を保有していないものも存在した。

被爆寺院の戦後の状況についての概要は次のようである。

原爆直後から寺院活動を続けていた寺院は，40.7%（33か寺）であり，一方，しばらく寺院活動を続けることができなかった寺院は，58.0%（47か寺）である。

寺院活動を停止した寺院で，被爆の年に活動を再開したという回答は，皆無であった。再開時期は，原爆の翌年1946（昭和21）年が14.8%（12か寺）で，もっとも多い。この年，翌年，翌々年もほぼ同様な割合で続き，1946（昭和21）年から1949（昭和24）年まで４年間では，あわせて40.7%（33か寺）が活動を再開した。1950（昭和25）年以降では9.9%（８か寺）が活動を再開しており，このうち１か寺は，1965（昭和40）年になって再開した。これらのなかには，被爆により寺院活動をまったく停止してしまった寺院は含まれていない。活動を再開した寺院の再開時期の違いから，各寺院で被爆状況および原爆の影響がかなり異なっていたことがうかがえる。

戦後の区画整理などにより境内地が変化した寺院では，「かなり広くなった」・「やや広くなった」と回答した寺院は，3.7%（３か寺）である。一方，「かなり狭くなった」・「やや狭くなった」と回答した寺院は，54.3%（44か寺）の高い割合を示している。「変わりない」と回答した寺院は，42.0%（34か寺）であった。被爆前より境内地が狭くなった寺院が多い（「図１」参照）。

戦後本堂を再建した寺院は，91.3%（63か寺）であり，戦前のままの寺院，8.7%（６か寺）を大きく上回っている。

戦後，本堂以外で新たに作った寺院施設については（アンケートの質問にたいして複数回答），会館・集会所がもっとも多く，44.4%（36か寺）である。次いで墓地を作った寺院が37.0%（30か寺），納骨堂を作った寺院が，28.4%（23か寺）と続いている。保育園・幼稚園を新たに作った寺院も27.2%（22か寺）あり，高い割合を占めている。鐘楼を作った寺院は，14.8%（12か寺）であった。

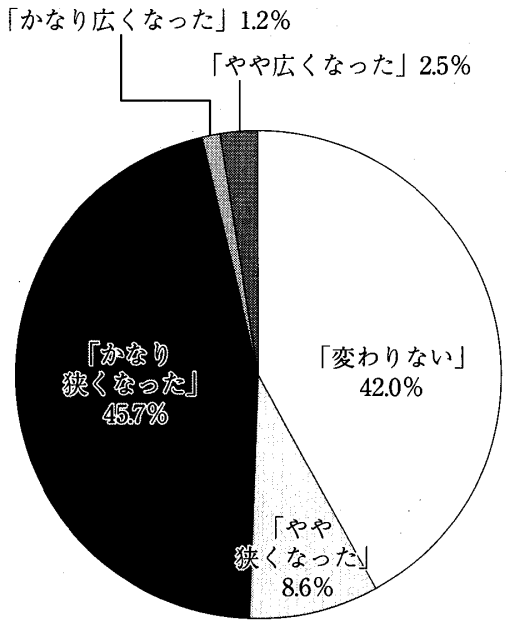


図1　戦前と戦後の境内地の変化

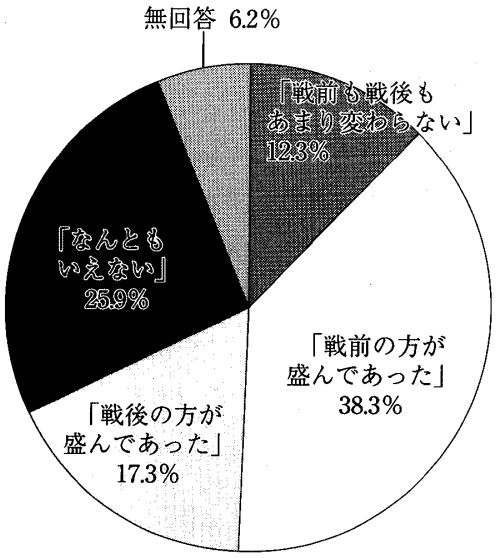


図2　戦前と戦後の寺院教化活動

寺院教化活動について，戦前と戦後を比較すると，「戦前の方が盛んであった」と回答した寺院は，38.3%（31か寺）であり，もっとも多い。これは，「戦後の方が盛んである」と回答した寺院17.3%（14か寺），「戦前も戦後もあまり変わらない」と回答した12.3%（10か寺）をかなり上回っている。「なんともいえない」と回答した寺院も，25.9%（21か寺）の高い割合を示している（「図2」参照）。

調査対象寺院に，原爆による被害のなかでもっとも痛手であったことが何だったか，たずねると，主なもので次のような回答であった（自由回答）。

「寺院が復興できないままである」
「活動組織が再興できていない」
「檀家（門徒）が半減した」
「檀家（門徒）が離散した」
「総代など多くの人材を失った」
「門徒の犠牲が大きかった」
「本堂・庫裏の焼失も大変だったが，それ以上に門徒の死亡，離散がもっとも痛手であった」
「檀家の被害が大きく，寺院の復興に協力できなかった」
「檀信徒との連絡が途絶えた」
「墓が無縁となった」
「住職・家族が亡くなった」
「原爆後しばらく行事ができなかった」
「伝統的に受けついできたものが失われた」など。

2．考察

原爆が投下される前，広島市内には仏教寺院が148か寺あった。宗派別寺院内訳は，真言宗寺院

16，浄土宗寺院21，臨済宗寺院６，曹洞宗寺院14，真宗寺院78，日蓮宗寺院13，計148か寺である[1]。仏教宗派は多岐に及び，寺院の被爆は市内中心部をはじめとして，広島市郊外にも広範囲に及んだ（「広島市原爆被災地図」[2] 参照。「爆心地」を中心に，半径約２キロの範囲の地図上色の濃い部分が建物の全壊・全焼区域）。

寺院の宗派では真宗が多数を占めていたが，広島市・広島市近郊は真宗をはじめとして仏教がさかんな土地柄であり，被爆前の各寺院と地域の人々のつながりは，かなり強いつながりを保ってきた。しかし，寺院の原爆被害，原爆前と後での寺院における変化，原爆による戦後の寺院活動への影響については，これまで十分明らかになっていない。[3]

被爆寺院で，本堂が全壊・全焼しても住職が無事であったところでは，早い例で1946（昭和21）年３月，仮本堂が建設された事例がある[4]。一方，上記調査結果で明らかなように，住職が原爆の犠牲になったり，住職家族が多数亡くなったり，寺院活動の担い手の門徒・檀徒の犠牲が多かった寺院では，寺院施設の再建にすぐには着手できていない。多くの寺院が被爆後，寺院復興に着手し，寺院活動を再開するまでにはかなりの時間がかかったことが上記の回答でも明らかである。

本堂・庫裏，本尊，過去帳，あるいは墓地といった寺院の主要な施設・財産に生じた被害でも，寺院の復興や寺院活動の再開に，かなりの困難があったことがうかがえる。

戦後の区画整理や道路・公園整備の都市計画により寺院が移転した，あるいは境内地が減少した寺院は少なくない。境内地の変更を余儀なくされた寺院もあり，境内地の変更，移転は，寺院復興を遅らせ，復興までにかなりの時間を要したであろう。戦後の寺院活動に種々の影響をあたえたと思われる。

寺院被害からの復興，さらに戦後の寺院活動に関しては，当然個々の寺院の実情，あるいは寺院宗派の別によるちがいも関係しているであろうが，寺院住職や家族，そして寺院檀信徒といった寺院構成員における原爆被害の実情が大きく関係していることが，上記の結果から明らかである。

おわりに―今後の検討課題

寺院における原爆被害の実態把握のためには，寺院における原爆前の状況，被爆時の状況，そして原爆後かなり長期にわたっての寺院の実態把握につとめなければならない。その際，ここで明らかなように，寺院の檀信徒をはじめとした人々，寺院構成員における被害状況や原爆後の寺院とのつながりについての実態把握が不可欠であろう。

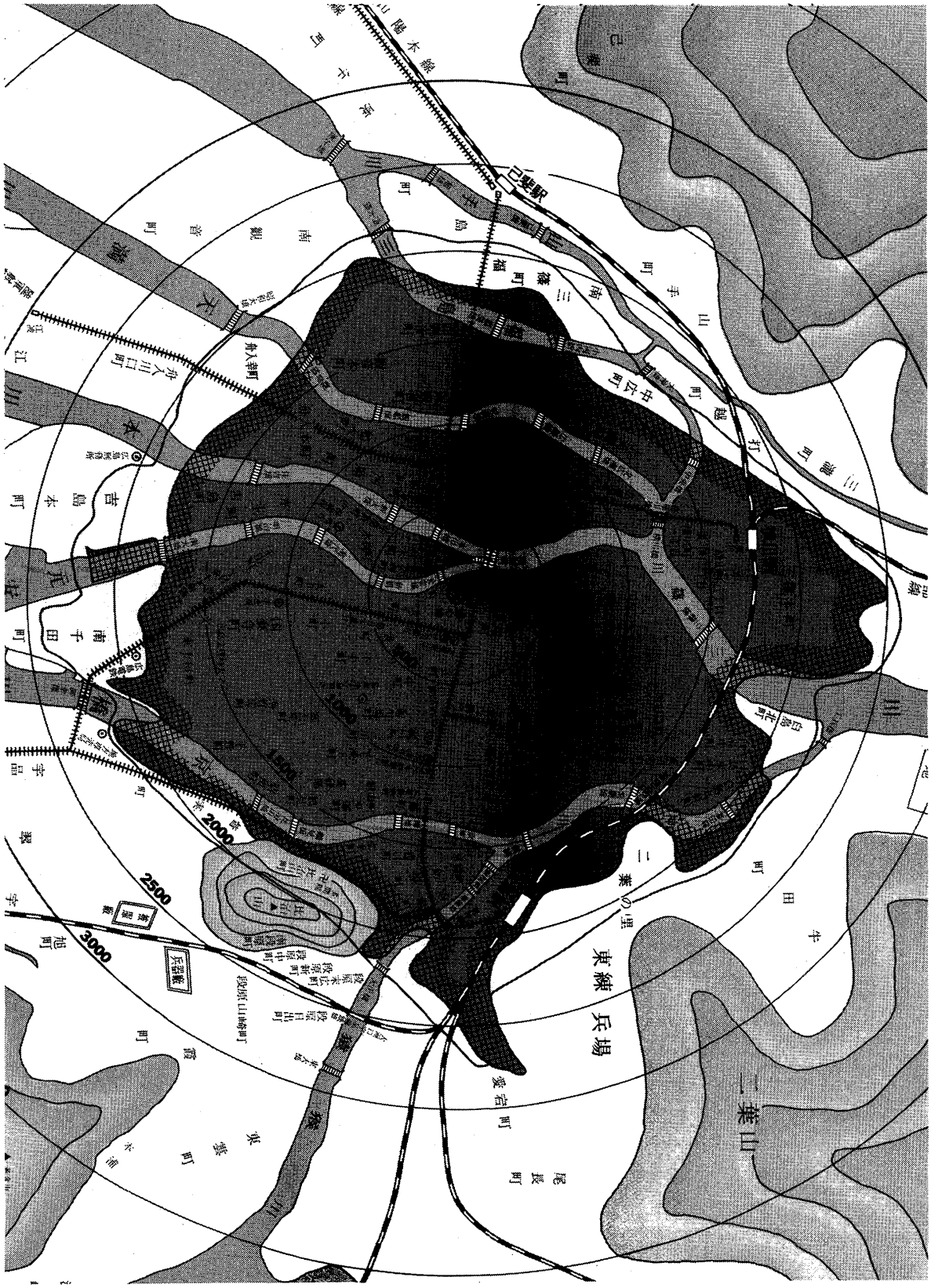
筆者は，前掲『原爆と寺院―ある真宗寺院の社会史―』で，爆心地に近い一真宗寺院を事例としてこうした問題を検討してきた。本稿で示したアンケート調査の結果を手がかりにして，今後さらに個別寺院の被爆実態や寺院全般にわたる被爆実態の把握から，長期にわたる原爆の影響に関する研究をすすめていきたい。

注

1）『広島市勢一班　昭和15年版』広島市発行。
2）『広島原爆戦災誌』第１巻，広島市，1971年。
3）広島市内の爆心地からの距離が異なる16か寺の寺院を含めて，宗教施設の被災状況については，『広島原爆戦災誌』第四巻，広島市，1971年，636頁以下参照。

仏教寺院，神社，キリスト教会，教派神道系教会の被災状況については，中外日報社広島支社編『広島県宗教連盟「戦後50年」誌ー平和と慰霊・追悼の歩みー』広島県宗教連盟，1996年参照。

4)『中国新聞』一九四六年三月十四日付。



「広島市原爆被災地図」(『広島原爆戦災誌』第1巻より)